

心霊スポットは妖怪である

——千葉県富津市「観音隧道」における異界的雰囲気と集合的記憶——

社会学部現代社会学科 2122014

指導教員 川瀬 由高

氏名 岩埜 紘史朗

要旨

「場所にまつわる集合的記憶はどのように発生し、変遷し、消滅するのか」という問いに対して、心霊スポットを通して考察することが本研究の目的である。そのため、心霊スポットにおける〈伝説〉を集合的記憶のメディアとみなし、その傾向性を分析することで、集合的記憶が歴史的にどう変化していくのか観察することを試みた。調査方法は、観音隧道にて31名のインタビューを含む、のべ24日間のフィールドワーク、オカルト本等を対象とした文献研究である。そこで得られたのは、雰囲気が集合的記憶の発生と変遷に大きく関わっていたこと、そして「心霊スポットは妖怪である」という新たな視座であった。

第一章では、従来の妖怪研究が前提としていた妖怪と神の連続性が、心霊スポットには通用しないことを指摘したうえで、心霊スポットとそこに現れる霊（妖怪の一種）を、妖怪体験を生み出す人々の感覚とそれを可能にする場所、さらにそうした体験が共有されることにより生じた人々の記憶という三つの視点から捉えなおすことを表明する。

第二章では、従来のトンネル論において展開されてきた境界論を批判しつつ、調査資料の量、歴史的視点の確保などの理由から、本論文では新たに雰囲気論の視点から心霊スポットとしてのトンネルを分析するアプローチを取ると論じる。

第三章では、トンネル〈伝説〉における怪異は、ドライバーが持つ独特の身体感覚（＝車内感覚）から発生するケースが多く、その感覚は雰囲気と呼べる性質を持つことを理由に、「トンネルにまつわる集合的記憶は、トンネルが持つ異界的雰囲気から発生し、再創造される」と結論付ける。さらに、集合的記憶は、「怪異の伝統化」（＝及川祥平の言う「連綿と怪異が発生しつづけてきたかのような認識」）により固定的に再生産されることを示す。

第四章では、身体感覚から車内感覚へと人々の感覚が延長していく過程で、トンネル〈伝説〉で語られる怪異の内容が変化した可能性を指摘したうえで、「場所に付帯する雰囲気の変容によって、場所にまつわる集合的記憶もまた変容を受ける」という仮説を提示する。さらに、心霊スポットで霊現象（＝霊によって引き起こされた怪異）が頻発する理由として、「いわれ」（＝怪異が起こる根拠となる過去の出来事）の存在に加え、「心霊スポット自体が妖怪である」という人々の解釈があるとしたうえで、そういった心霊スポット及び妖怪は雰囲気の介在によって初めて立ち上がる存在であると結論付ける。

第五章では、今までの議論をまとめるとともに、心霊スポット研究が海外にも存在すること、心霊スポット研究が妖怪研究とも接続できることから、今後の心霊スポット研究について展望する。心霊スポットは地域住民にとって迷惑な場所であることを読者に伝えたいうえで、そういった迷惑な心霊スポットを忘却することは可能なのかについて考察する。